

2024. 10. 31

【日本鉱工業生産（24年9月）】

生産は2ヵ月ぶりプラス、自動車が寄与

～先行きは設備投資計画の進捗等により均せば回復を予想～



経済調査部 エコノミスト
藤田 敬史

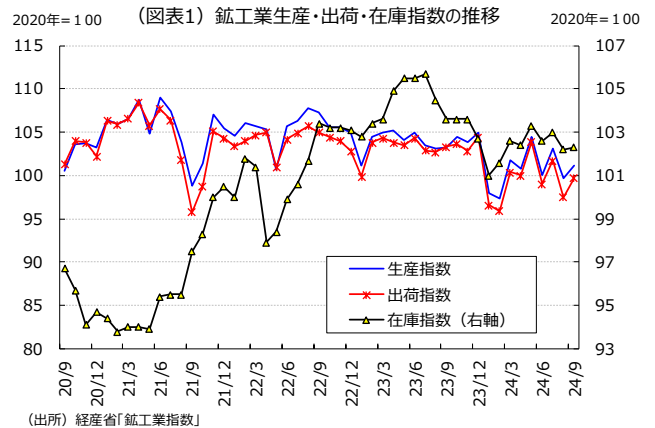
ポイント

- 9月の鉱工業生産指数（季調値）は前月比+1.4%と、2ヵ月ぶりのプラスとなった。経産省は基調判断を「生産は一進一退」にすえ置いた
- 大手自動車メーカーが6月に発覚した認証不正問題で中止していた生産を再開したほか、8月の台風接近に伴い一時停止した工場稼働を再開させたことから自動車がプラスとなった。また、猛暑の影響でエアコンも伸びた
- 先行きの生産は、設備投資計画が徐々に実行に移されること等により、均せば回復傾向が続くと予想する

1. 生産は2ヵ月ぶりのプラス

9月の鉱工業生産指数（季調値）は前月比+1.4%（図表1）と2ヵ月ぶりのプラスとなった。経産省は基調判断を「生産は一進一退」にすえ置いた（図表2）。

業種別に見ると、主要15業種中10業種が前月比プラス、5業種がマイナスとなった。プラス寄与となった業種の1位は自動車工業（前月比+7.1%、寄与度+0.88%ポイント）、2位は無機・有機化学工業（同+6.6%、同+0.28%ポイント）、3位は電気・情報通信機械工業（同+2.2%、同+0.19%ポイント）であった。一方、マイナス寄与となった業種では、1位が生産用機械工業（同▲1.7%、同▲0.14%ポイント）、2位は輸送機械工業（除、自動車工業）（同▲3.1%、同▲0.10%ポイント）、3位は化学工業（除、無機・有機化学工業・医薬品）（同▲1.6%、同▲0.08%ポイント）であった。



(図表2) 鉱工業生産の基調判断の推移

	基調判断	方向性
21年11月～22年3月	生産は持ち直しの動きがみられる	↑
22年4月	生産は足踏みをしている	↓
22年5月	生産は弱含み	↓
22年6月～7月	生産は一進一退	↑
22年8月～9月	生産は緩やかな持ち直しの動き	↑
22年10月	生産は緩やかに持ち直しているものの、一部に弱さがみられる	↓
22年11月～23年2月	生産は弱含み	↓
23年3月～6月	生産は緩やかな持ち直しの動き	↑
23年7月～12月	生産は一進一退	↓
24年1月～6月	生産は一進一退ながら弱含み	↓
24年7月～	生産は一進一退	↑

(出所) 経産省「鉱工業指数」

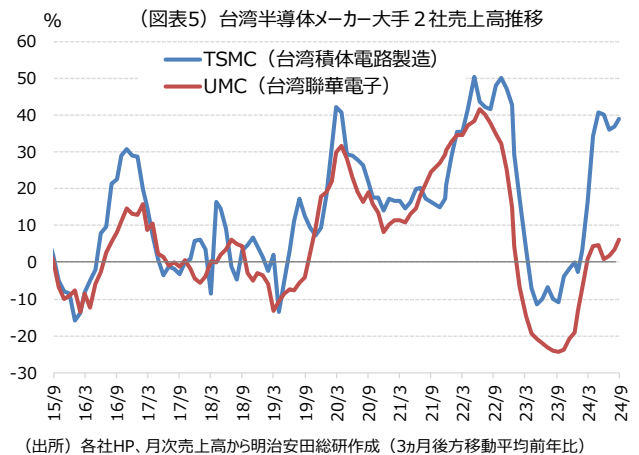
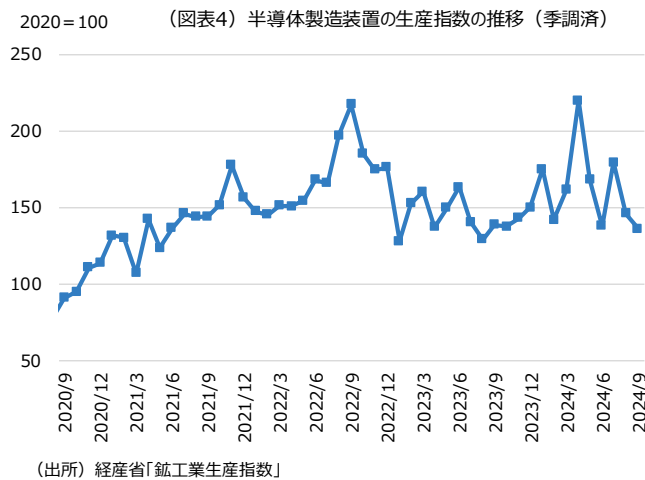
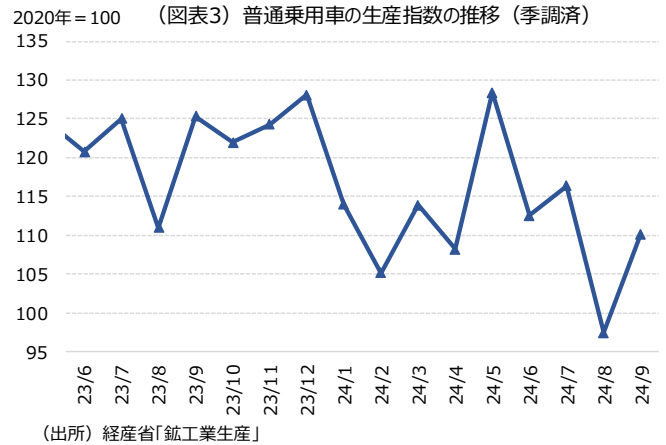
2. 普通乗用車が2ヵ月ぶりのプラス、半導体製造装置は2ヵ月連続マイナス

プラス寄与が1番大きかった自動車工業の内訳では、普通乗用車が前月比+13.0%と大きく伸び、2ヵ月ぶりのプ

ラスとなった（図表 3）。大手自動車メーカーが 6 月に発覚した認証不正問題で生産を中止していた 3 車種について、9 月 4 日から生産を再開したほか、8 月の台風接近に伴い一時停止した工場稼働を再開させたことがプラスに影響した。

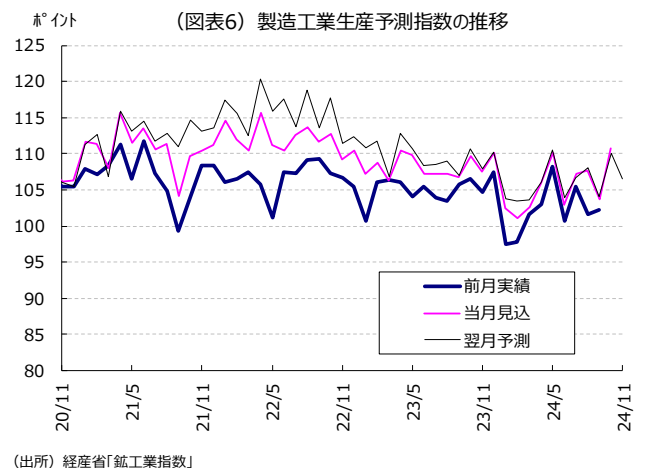
プラス寄与 2 位の無機・有機化学工業では、8 月に設備や原材料調達におけるトラブルが発生し落ち込んだフェノールがトラブル解消により大きく伸びた（前月比+71.0%、寄与度+0.06%ポイント）。3 位の電気・情報通信機械工業では、猛暑による需要の高まりからセパレート形エアコンがプラスとなった（同+9.8%、同+0.07%ポイント）。

一方、マイナス寄与が 1 番大きかった生産用機械工業では、半導体製造装置（前月比▲7.0%、寄与度▲0.21%ポイント）が 2 ヶ月連続のマイナスとなった（図表 4）。元々振れの大きい品目であり、4 月は前月比+36.1%、5 月は同▲23.9%、6 月は同▲18.0%、7 月は同+30.2%、8 月は同▲18.6%という推移だが、均せば回復傾向が続いている（後述）。WSTS（世界半導体市場統計）の半導体市場予測（2024 年 6 月）では、2024 年、2025 年の半導体市場は堅調な成長が予想されている。また、シリコンサイクル（半導体市場の好不況の波）も回復基調にある様子が見えてくる（図表 5）。



3. 半導体製造装置等がプラス寄与予想

製造工業生産予測指数を見ると、10 月は前月比+8.3%、11 月は同▲3.7%となっている（図表 6）。10 月は生産用機械工業（前月比+40.5%、寄与度+4.56%ポイント）、輸送機械工業（同+6.5%、同+1.35%ポイント）等のプラス寄与が見込まれている。11 月は生産用機械工業（同▲19.0%、同▲2.77%ポイント）、電子部品・デバイス工業（同▲4.7%、同▲0.44%ポイント）等がマイナスの見通しである。なお、計画値に含まれる上方バイアスを経産省が補正計算した 10 月の予測値は同+5.1%



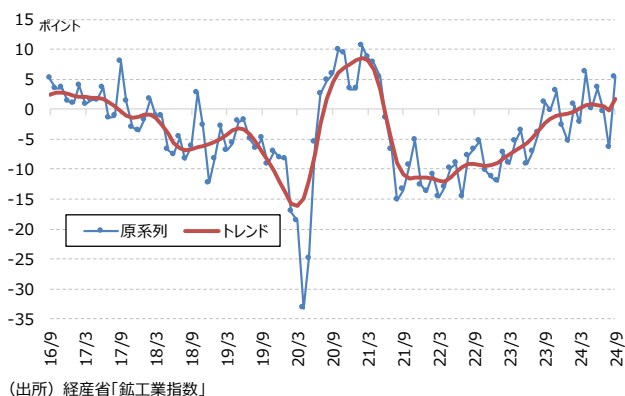
である。

生産用機械工業は、8、9月と2ヵ月連続のマイナスだったが、10月の予測値は一転して4割増となっている。半導体・フラットパネルディスプレイ製造装置、プラスチック・金属加工機械等の品目が伸びるとのことである。11月はマイナス予想だが、2ヵ月通算では+13.8%と二桁の伸びを確保、主要11業種中最も高い伸びとなっている。堅調な半導体市場を背景に、当面は生産用機械工業が生産全体をけん引する展開が期待される。

また、自動車の挽回生産を見込む輸送機械工業は、10-11月の2ヵ月通算で+5.3%と主要11業種中4番目に高い伸びとなっている。

企業の生産活動に対する姿勢を示す生産活動マインド指標（DI）は+5.3と前月の▲6.5からプラス転換、トレンドは+1.7となった。経産省はDIのトレンドが▲5を下回ると景気後退局面入りの可能性が高いとしているが、過去15ヵ月間これを上回っている（図表7）。

（図表7）生産活動マインド指標（DI）

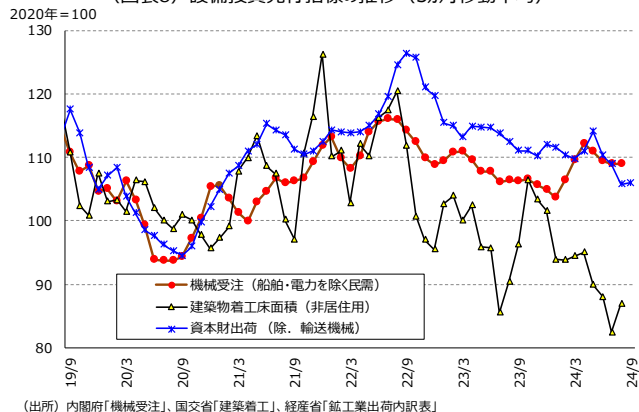


4. 設備投資計画、徐々に実行へ

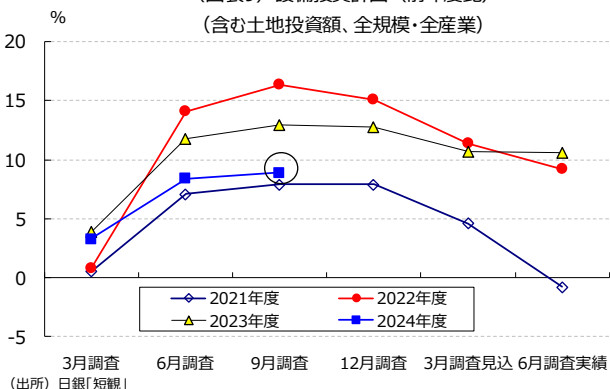
設備投資の先行指標の一つである9月の資本財出荷（除、輸送機械）は前月比▲2.1%と、8月の同▲4.1%に続き2ヵ月連続のマイナスとなった（図表8）。その他の先行指標を見ると、8月の機械受注（船舶・電力を除く民需）は前月比▲1.9%と2ヵ月連続のマイナスで、公表元の内閣府は基調判断を「持ち直しの動きに足踏みがみられる」にすえ置いた。建築物着工床面積は振れが大きいですが、均せば一進一退の推移で、足元では弱含んでいる。

前述の各指標は元々振れが大きいという特徴があり、それだけで設備投資の基調をはっきりと確認できるわけではない。ただ、内閣府と財務省が9月12日に公表した法人企業景気予測調査（7-9月期調査）では、2024年度設備投資額は前年度比+12.5%（4-6月期調査+12.1%）と高い伸びとなったのに続き、日銀が10月1日に公表した日銀短観における2024年度設備投資計画（全規模・全産業ベース）でも、前回調査の前年度比+8.4%から同+8.9%へと上方修正された（図表9）。企業収益も高水準を維持しており、今後、強めの計画が徐々に実行に移される展開が期待される。

（図表8）設備投資先行指標の推移（3ヵ月移動平均）



（図表9）設備投資計画（前年度比）
（含む土地投資額、全規模・全産業）



本レポートに関するご取材やお問い合わせは以下までご連絡ください

明治安田総合研究所 エコノミスト 藤田 敬史

電話番号：03-6261-7947

e-mail：takafumi.fujita@myri.co.jp

※本レポートは、明治安田総合研究所が情報提供資料として作成したものであり、いかなる契約の締結や解約を目的としたものではありません。掲載内容について細心の注意を払っていますが、これによりその情報に関する信頼性、正確性、完全性などについて保証するものではありません。掲載された情報を用いた結果生じた直接的、間接的トラブルや損失、損害については、一切の責任を負いません。またこれらの情報は、予告なく掲載を変更、中断、中止することがあります。

●発行元●株式会社明治安田総合研究所〒102-0073東京都千代田区九段北3-2-11TEL03-6261-6411